

ソクラテス

1. 『パイドン』 自然哲学から人間の生き方の問いへ

アナクサゴラスは「万物の原因は知性である」としながら、実際に行なっていたのは物を中心とする自然哲学の観点から世界を見通すことであった。

「なぜソクラテスは、死刑判決を受けた後、脱獄できたにもかかわらず牢獄に留まって座り、死刑を受け入れたのか。」この理由は、骨格や筋肉の伸縮といった生理学的、物的観点からのみでは説明できない。ソクラテスが脱獄しなかった理由は、彼の知性が、それがよいことであると判断したからである。このことから、「**人間の身体ではなく人間の知性が、人間の行為や価値判断の原因である**」とソクラテスは考えた。

2. 『ソクラテスの弁明』 心の吟味、無知の自覚

ソクラテス裁判の罪状は、「弱論を強弁する技術を使用拡散し、また鬼神を導入することによって、青年を腐敗させている」というものであった。これに対しソクラテスは、彼は各自の心の吟味を青年たちに促すことで、無知の無自覚からより進んだ無知の自覚に導いているから、むしろ青年たちを謙虚にしていると反論した。

またソクラテスは、自身を、巨大で鈍い国家アテナイを目覚めさせるために「神から遣わされたアブのようなもの」として、人々の生き方が、正しさ・思慮・真実を判定基準とせず、感情・金銭名誉地位欲によって左右されていることを批判した。

デルポイの神託は「**ソクラテスよりも知恵のある者はいない**」というものであった。ソクラテスが後に見出したのは、知恵があると称されたり、知恵があると自称したりする人々は、彼らのうち何者も自分が知っていると思うことについて実際には何も知っていなかったということであった。彼らは知らないのに知っていると思うが、ソクラテスは知らないで知らないと思っている。この点でソクラテスは誰よりも知恵がある。これが神託の真意である、とソクラテスは理解した。また、自分は知らないということの自覚があるからこそ、その人ははじめて善美の事柄の探求に、自己と他者の**心の吟味**に、向かって進むことができるとした。

魂への配慮とは、自分及び他人の心の状態を気にかけて、それらが正しく美しく良いものであるか否かを吟味することである。自分及び他人の魂の損欠を発見・治療することは、身体的疾病の発見・治療以上に、良く生きることに関わらない。魂への配慮は、例えば「徳とは何か」といった、正しさ美しさ良さに関する対話問答を通して、通常は表に現れない自分及び他人の思考、すなわち心の状態を明らかにすることを通して達成される。

3. 『ゴルギアス』 エレンコス

エレンコス（反論）の構造

段階 1: 対話相手が命題 A を主張する。

段階 2: ソクラテスは直接 A を扱わず、他の命題 B,C について対話相手から同意を得る。

段階 3: 同意された命題 B,C から、命題 notA を導く。

段階 4: A と notA との間で、対話相手の信念群に矛盾が生じていることが明らかになる。

段階 5: 対話相手は A を棄却し、notA を受け入れることで、考え方が変わる。

エレンコスとは**対話問答を通じた反駁による相手の信念の吟味**である。ポロスは初め「不正を受ける方が不正を行うよりも悪い」という信念を持っていた。また同時に、「不正を行う方が不正を受けるよりも醜い」「より醜い方がより悪い」という信念もポロスは持っていた。次に、後ろ 2 つの同意事項から、「不正を行う方が不正を受けるよりも悪

い」という、最初のポロスの信念とは矛盾する結論が導かれた。結論を保持し、最初のポロスの信念を捨てることで、ポロスの信念群に変化が生じた。以上がエレンコスの過程である。

4. 『ゴルギアス』カリクレスの立場

コロスは「不正を行う方が不正を受けるよりも酷い」ということに同意したが、カリクレスはこれに同意せず、逆に「不正を受けることは弱者の証であり、不正を行うよりも醜い」と主張した。

カリクレスによれば、コロスの考え方は弱者のための**法律習慣 nomos**に基づいており、強者の論理のもとでは欲望拡大のままに欲望を充足させることがなっているという。ポロスの場合は、ソクラテスとポロスの間で同意された命題から導き出された結論によって、論駁による被論駁者の信念変更（エレンコス）が可能であった。しかし、ソクラテスとカリクレスの間には隔たりが大きいために同意事項を定められず、結果としてエレンコスに至らなかった。

コロス B: 不正を行う方が、不正を受けるよりも酷い

カリクレス notB: 不正を受ける方が、不正を行うよりも醜い

（これが**自然 physis**のあり方である。不正を受けるのは弱者の印であるから醜い。法律の制定者は弱い者であるから、彼らは自分達の利益に基づいた取り決めより多くのものを持つことが自然のあり方である。以上のようにカリクレスは主張する。）エレンコスによって、相手を反駁することはでいなくても、カリクレスの、現実世界を渡り歩く政治家、強者、動物的本能に従う弱肉強食の発想、という信念が明らかになった。自己と他者の吟味、徳とその他の事柄について毎日議論することが最大の善である、吟味のない生活は人間の生活ではない、とソクラテスは考える。

カリクレスは、正しく生きようとする者は、欲望は大きくなるままに放置させ、欲望充足を優先させることを主張する。これに対しソクラテスは、絶えず注いでいなければ苦痛を味わう孔の空いた甕（欲望充足を求める人間）と、一度注ぎいれれば落ち着いていられる健全な甕（節制を求める）と、どちらがよいかと問う。

プラトン

5. 『パイドン』哲学は死の練習である

ソクラテスは徳や正しさといった善美の事柄の定義を試み、その行き詰まり（アポリア）から、無知の自覚を説く傾向が強いとされる。例えば『弁明』では、死は良いものなのか悪いものなのかわからない、とソクラテスは明言を避けていた。これに対してプラトンは、**無知の自覚という立場を土台にして、その先の積極的な知の追求を試みる。**

[1]真に知を求める人は、視覚・聴覚による過ちから逃れ、触覚的快樂を避ける。彼らは、肉体による制約・束縛から離れようとし、できる限り身体的刺激による感覚を必要としない、純粋な思惟の領域を目指す。[2]ところで、死とは魂の肉体からの分離・解放であるとする。すると、知を求めている人が心がけていることと、死を求めている人が心がけていることは、魂を肉体から分離解放しようとしている点で、同じである。[3]魂の肉体からの分離が完成するのは死であるから、可能な限りそれらの分離を目指す知を愛知者（哲学者）は、**死ぬことを練習している**といえる。[4]魂が肉体から分離して単独で存在するとする主張は、後に魂は不死であるという理論へと発展する。

6. 『パイドン』 想起説から魂の不死説への論理的関係

想起説：学ぶとは、すでに知っていることを思い出すことである。

（常識：学ぶとは、まだ知らないことをこれから知ることである。）

（１）Aを見る時にBを連想することは、想起である。（A, Bは任意の観念とする）

（２）Aに類似したA'を見たときに、Aそれ自体を連想することも、想起である。（例えば、2本のほぼ等しい長さの木材を見たときに、等しさそれ自体を連想することは、想起である。このとき我々は、等さの類似から、等しさそれ自体を想起する。）

（３）ところで、Aに類似したA'を見たときに、Aそれ自体を連想するためには、A'を見る以前にAそれ自体を知っていなければならない。（例えば、等さの類似[2本の木材]を見る前に、等さそれ自体を見ていなければ、等さそれ自体は想起されない。）

（４）ゆえに、A（任意の観念）は、学ばれるものではなく、類似A'を見る以前に獲得されたAの知識が想起されるものである。

（５）等さは常に感覚によって思い起こされるのだが、最初に等さの知識を獲得するのは、我々が感覚をし始める以前、すなわち誕生以前でなければならない。[ここから、魂が、肉体と結びつく前に等しさを知った、すなわち魂が肉体から独立して存在し、魂は不死であることが証明される。]想起説から、魂と肉体の分離説、魂は不死であるという結論が導かれる。

7. 『パイドン』 想起説から魂の不死へ

本物の等さを想起するためには、想起する以前に本物の等さを見たことがなければならない。我々は感覚するたびに等しさを想起するのだが、感覚以前にかつて見たはずであるが、果たしていつ見たのか？生まれて以来我々は何かを感覚している。すなわち、生まれる以前に本物の等しさを見た（等しさそのものの知識を獲得した）ということである。

想起説と魂の立場との密接な関係

想起説：生前に魂だけの状態がある 「不死証明の一つの翼」 想起説は、魂の不死の証明の一部として役割を担う。なぜなら、**想起説からは、人間が生まれる以前に、魂が肉体とは分離して独立に存在していたことが明らかになるからである。**

それは、想起説が次のことを示すことによる：（１）我々はこの世界で等しさそのものを見ることはなく、等しさと類似した等しさではないものを見ている。（２）人が等しさを想起するためには、人は過去に等しさそのものを見ていなければならない。（３）人は見ること（感覚）をきっかけにものの等しさを想起する。（４）ゆえに人は、感覚以前、すなわち生まれる前に等しさの知識を得た。

また次の立場「知を求めることは死の練習である。なぜなら、思惟することとは様々な錯誤をもたらす肉体や感覚から魂が離れようと試みることであり、また死とは実際に魂が肉体から分離することだからである」を、想起説は実際に魂が肉体と分離しうることを示すことで、支えている。

8. 『国家』 洞窟の比喻とソクラテスの営み

視覚を通して現れる領域と魂が思惟によって知られる世界との対比。洞窟内、および上方世界の光源は、太陽に比すべきもの。この比喻は、教育と無教育について行われた。洞窟の比喻とソクラテスの営みが重なり合う点はどこか。

洞窟の比喻では、特定の方向だけを見ている洞窟の囚人の眼を強制的に向け変えさせ、地上へと導き、太陽の光を強制的に見せようとする人が描かれている。

これは、視覚を通して現れる領域で生きる人々の魂がむけている方向を変えさせ、魂が思惟によって把握する世界のもとに導き、両方の世界のあらゆる善きものの概念的原因と

なっている「善の実相」の方向へと、強制的に魂を向け変えさせるソクラテスのことを指している。ソクラテスは、徳とは何かといったことを人々に執拗に問い、人々は半ば強制的に参加させられた対話問答によって、自分の魂を吟味せざるを得なくなる。

洞窟の囚人たち（視覚によってものを捉える人々）に上の世界（魂が思惟によって捉える世界）のことを説得しようとしても笑い物にされ、殺されうるような人とは、まさにその営みが人々を惑わすものと誤解され、人民裁判によって死刑を宣告されたソクラテスのことを指している。

教育とは、知識のない魂に知識を注入することではない。教育とは、魂を、視覚に現れる領域から、思惟によって把握される善の実相（あらゆる美しいもの、正しいものの原因となっている）へと向き変えることである。これは、ソクラテスのエレンコスによってもなされる。

洞窟の比喩における教育は上のように論じられた。思慮ある行為を個人レベルで行うだけでなく、国家レベルで行うためにはどのようなことが必要か、ということが考えられる。その際に教育が施されるのは、将来の国家の統治者である。哲学をする者が王でもあることが理想国家であるとする、哲人王の思想にもつながる。

9.『国家』正しさについて

「正しい国家」から「正しい個人」へ向かう過程に着目しながら概観せよ。その際に、洞窟の比喩における教育との関わりに言及せよ。

プラトンは正義の探求において、国家レベルでなされる正義をまず見極め、その知見を個人レベルでなされる正義に擦り合わせる、という方法を探る。というのも、国家に備わる正しさは個人の備わる正しさの類似だからである。

前提として国家は、生産者、軍人、支配者の3種族から成る。また、正しい国家においては次の三つが成り立つ：（1）支配者には国家全体の利益を考察する知恵が備わり、（2）軍人には恐れて然るべきものとそうでないものを見分ける知識、すなわち勇気が備わり、（3）節制によって国家の各諸部分が互いに調和し、支配者による支配に同意して秩序が保たれている。

以上のことを総合すると、国家を正しくあらしめる正しさ<正義>とは、素質の異なった国家内部の3種族が、それぞれの素質に適した職務/機能/使命を果たし、己の分を守って管轄外のことに介入しない状態のことであると結論づけられる。

以上国家の正しさを、人間について擦り合わせると：正しい人間は、素質の異なった3つの諸部分がそれぞれの素質に適した機能を果たしているときに実現されるといえる。すなわち、人間の支配的部分である理性が全体を配慮し（知恵）、気概が諸々の快苦に際して恐るべきものとそうでないものについて理性がもたらす知識の通りに行い（勇気）、全体が魂による支配に同意して葛藤なく調和している（節制）ときである。

正しさの探求において、国家の支配者が人間の魂に類比された。このことに加え、洞窟の比喩では人間の魂が教育<魂の向け変え>の対象となったことを鑑みると、国家の支配者は最も丹念な教育の対象となる部分であると想定できる。この考えはのちに哲人王思想に発展していく。この際に、国制に携わる人間（国家の支配者）各自の魂が正しい状態にあることが原因となって、また国家全体でも正しいことが成立することが念頭に置かれている。

アリストテレス

10.『政治学』人間のポリス性

ポリス的動物には、ヒト以外にも、ミツバチ、アリ、ツルなどがあり、構成員全員の仕事がある一つのそして共通のものになる場合である。例えば、ツルのポリス性は、群れの両端にいる鶴が危険を知らせることによって長距離を安全に移動し、地上にいるときも夜は一匹だけ起きて外敵から守る、といったことに表れる。このようにアリストテレスでは、生物動物学研究、人間学、政治学との連関が見て取れる。

ポリスの形成過程をめぐる政治学の考察が、人間のポリス性について示唆するところをまとめよ。アリストテレスによれば、人間のポリスの生成過程は次の次第である。

まず、男女が出産のために自ずと（自然と）一対となって、夫婦を構成する。

次に、支配者と被支配者が、食事などの日々の用という自然の必要に応じて、家という共同体を構成する。更に、季節や年単位の必要に応じて、自然に即して家々が集まって村が形成される。

村々が集まるとポリスが形成される。ポリスの発生は人間の生活のためになされるのであるが、ポリスの維持存続は人々のよき生活のためになされる。以上すべての共同体は自然の必要に即して発生したものである。

上のような過程を経て自然に形成され、ただ人々が生きるのではなく人々がよく生きるためにポリスを持つこと。これが、他の動物とは異なる、人間特有のポリス性である。

人間は他のどの動物よりもポリス的である。人間だけが言葉を持つ。動物が持つような快不快を表示する音声（感覚によって共有する）でなく、とりわけ善悪正邪益害に関する知覚を表示する言葉（思考によって共有する）を持つのは人間だけである。家や国家を作ることができるのは、共通の善悪の知覚をもつからであるとする。

11.『倫理学』

性格の徳が中間であることの意味を説明せよ。

アリストテレスによれば、徳とは各々が特有に持つ諸能力を発揮させることにある。人間の場合、その特有性は、ことわりを有する思考と、ことわりに従う性格とにある。したがって人間の徳には、思考に関するものと性格に関するものがある。

後者性格の徳は、生得的にではなく習慣によって得られる。例えば勇敢の徳は、人は生まれながらにこれを持たず、勇敢な行為を繰り返すことで形成される。ところで勇敢な行為は、恐怖という情念の保持を、その不足によって蛮勇とならず、またその超過によって臆病とならぬ、中間の仕方で行うことでなされる。また、持つべき適切な恐怖感覚の中間的度合いは、我々の置かれる状況（当人の持つ性質や、当人の行為の目的等）に相対的な仕方に変化する。

総合すると、性格の徳を持つ人間とは、状況に応じた適切な中間の程度に感覚情念を保持し、行為できる人間である。なお中間を射止めるのは困難である。

12.『政治学』国制論

アリストテレスにとって「最善の国制」が「幸福」に基づくと考えられる理由を説明せよ。最善の国制は、[a]被支配者の利益を目的とした国制のもとに、[b]徳において卓越した支配者によって国家が統治される場合である。

[a] なぜなら、そもそも国家とは支配者と被支配者が自然的必要のために一体となった結果生じたものであるゆえ、支配者と被支配者の共通の必要（利益）を満たす国家でなければ存続し得ないのだが、全市民が望む共通の自然的必要とは善く生きることすなわち幸福だからである。（国制とは、国家をその目的—全市民の幸福—達成へと導くための制度であるから）この幸福という万人の必要（利益）を最も満たすものが、最も真正の国家であり、国制の機能を最もよく発揮するゆえに有徳な国家であり、最善の国制である。こういうわけで、最善の国制は全市民の幸福を最も満たすものであることが、国家の概念規定の内容にはじめから含まれていた。

[b] なぜなら、国制が有徳であるのは国制を司る支配者が有徳であることに負うのであるが、有徳な人間であることとポリスの卓越した支配者たることは大概同じだからである。というのも、そもそも徳とは各々が持つ特性の卓越であり、人間の特性は(1)ポリスの動物であることと(2)理を保持する思考と理に従う感情とを持つことであるため、ポリス性と理性の卓越は人間の徳の概念規定の内容にはじめから含まれていたからである。

（三つの正しい国制）：被支配者の利益を目的とする

単独：王制、少数：貴族制、多数：共和制

（三つの逸脱した国制）：支配者の側の利益が目的となっている

単独：僭主制、少数：寡頭制、多数：民主制（支配者多数派の利益を目的としている限り逸脱している）いずれとして公共全体の利益を目的とするものではない。

最善の国制はどれか。[最善の国制]ポリスが最も幸福でありうるような国制。

最善の人々によって統治されるものが最善の国制である。支配者が被支配者よりも徳において卓越している国制。国家が有徳であるのは、国民権保持者が有徳であることに依る。人間はいかに有徳になるか。

人間が有徳になるためには、生得的素質、慣習、理、の諸条件が満たされることによる。最初のものは当人から外的なものによって、後二者は教育によって整えられる。教育・習慣は、有徳な人間をつくるものと自由な国の支配者を作るものと同じである。支配者教育＝人間が徳によって立派になる。

[倫理学]

以上3つのものの調和が成り立つときに人は有徳である（人間としての完成を迎える）。教育がこれに深く関わっている。習慣によって学ぶことと、教示によって学ぶこととがある。学んだ人間が、ポリスの動物である人間の到達点。

[国制論]

上の完成した人々が国家の統治にあたり、国の重要な事柄について熟慮する。